

二十歳の助走③



世界を舞台に

活躍する人たちは、

「若き日」に何を学び、
何に挑戦したのか。



会議通訳者

長井鞠子

学生運動に揺れるキャンパスで育まれた 好奇心が武器になった

——会議の同時通訳、逐語通訳で日々ご活躍です。

長井 昨日は原子力の会議に入り、今日はNBAの選手の取材、明日は外国の首脳を交えた国際問題のシンポジウムと、話題の対象が日々変わります。首脳会談もあれば、iPS細胞についての国際会議、何でもやります。古くは試験管ベビーに関する学会や自動車のロータリーエンジンの発表会なども手がけました。一つのことをじつくりと掘り下げることはできませんが、浅くてもいいから、人間の営むことすべてに関心を持つような好奇心旺盛な方に

は向いている仕事ですね。もちろんよい通訳ができるよう、日々の勉強は欠かせませんが。

学生集会から始まった通訳体験

——その好奇心はどこで育まれたのですか。

長井 小さい頃からそういうところはありましたが、大学時代は大きなきっかけになりました。一九六〇年代半ばから後半にかけて、学生運動の胎動期です。

私が通っていた国際基督教大学はなかなか先鋭的なと

ところで、入学した頃から毎年キャンパスでストがありました。全学生が一〇〇〇人に満たない大学ですから、みんなが巻き込まれます。それまでミッシェンスクールではんわかと育った私には、それがとても刺激的で、魅力的でした。おもちゃ箱をひっくり返して遊ぶ子どものように、あれこれ見て回り、考えることに夢中になっていました。一つのイデオロギーに染まったりはしませんでした。一つのイデオロギーに取り組んで、議論し、行動しましたが、私なりに真剣に取り組んで、議論し、行動し、挫折もするなかで、社会との接点を見出していった。面白い環境でした。

——英語を使うこともあったのですか。

長井 留学生など外国人の多い大学でしたから、学内の闘争集会に同時通訳が入るんです。私が高校時代にアメリカに留学していたことを知っていた先輩が、「お前英語でできるんだろ」と無理やり通訳ブースに入れられて、即興で訳すこともありました。振り返れば、それが初めての通訳体験ということになります。そのほかにも、ベ平連（ベトナムに平和を市民連合）の集会に足を運んでボランティアの通訳などもしました。

思い出に残るのは、東京オリンピックです。まだ英語を話せる人は多くない時代ですから、各大学に通訳枠が割り

当てられ、幸運にも私が選ばれました。担当したのは水泳で、「二着、第一のコース、〇〇選手」というアナウンスが仕事です。その当時最大のイベントに参加できて、しかもお給料も高かった。よい記念になりました。

——そこから通訳の道へと進まれたのですね。

長井 強い信念を持ってこの道に、と決めていたわけではありません。ただ、そのような経験をするなかで、通訳の面白さは感じていました。ご縁があつて、サイマルの創設者のひとりである村松増美さんに声をかけていただいたのが直接のきっかけです。ベ平連をはじめいろいろなところでボランティアで通訳をしていた私の姿を見て、評価してくださったようです。

——実際に仕事を始められて、いかがでしたか。

長井 自分の関心にしたがつて、ボランティアで通訳するのと、お金をもらって相手の要望に応じて水準を保った通訳をするのでは、まるで違いました。長時間の会議では途中にコーヒープレイクが入りますが、うまくできていないときは、恥ずかしくてロビーにも出られなかったです。先輩から口うるさくいわれたことはありませんが、負けず嫌いですから、とにかく資料を読み込んで、準備に時間をかけて、この次こそはと秘かに思うことも数多かったです。

——この仕事はうまくできた、という実感を得られたのはいつ頃からですか。

長井 いまでもこれで満足ということはありません。ただ、通訳を始めて三年目くらいだったでしょうか。あるエンジニアリングに関する会議で同時通訳をしました。片やまったく英語がわからない素朴な感じの日本人の学者さんと、片やアメリカからやってきたバリバリの若手の研究者が、二人でセッションを行う。二人とも通訳のイアホンをつけて、「先生のこれは、こういうことですか」「そうです」「ではあれは」「それは違います。こういうことです」と、とても自然にやりとりが進んでいくのを見て、これは私の存在があるからできるんだと実感したことは、いまでも忘れません。

会議の後の皆さんの表情や言葉から、何となくできのよし悪しはわかります。褒めていただけると、やはり嬉しい。逆に、「今回のお仕事は大変でしたね」と言われるのは、それがねぎらいであることはわかっていても、嫌ですね。

国の文化や歴史をかし出し出す言葉がほしい

——外交現場での通訳経験も豊富です。印象に残っている方はいらっしゃいますか。

長井 魅力的な方はたくさんいらっしゃいましたが、中曽根康弘さんの話は訳しやすかったです。どんなときも端折らずに起承転結があつて、話が明瞭でした。他方で言葉をつないではいるのですが、意味が不明瞭な方もいらしたり、いろいろです。

外国の首脳と間近に接する機会もありました。サミットなどで感心したのは、ヨーロッパの知性ある首脳たちが、会話の端々にこの国の歴史や文化を感じさせるフレーズを入れてくることです。ミッテランさんなどはそれが上手で、さりげなく「ルソーによれば」「モンテスキューの言葉だけど」などと嫌みなく話します。

——国際交渉ならではの苦労もあると思います。

長井 いまはどうかわかりませんが、昔はとにかく長かったです。徹夜することが努力の証明みたいなところがあつて、明け方まで続くことも珍しくなかったです。

それと、政治家が出席する会議などでは、政治家の個性に合わせて事務方の「準備」も増えます。ある中央官庁のご依頼で通訳をした時の話ですが、事務方から「この方は何でも断定する癖がありますから、全部 maybe とつけてください」と言われたり(笑)。実際は、それほどでもなかったですが。

——通訳として目指していることはありますか。

長井 「ああ、この人が英語でしゃべっているのだけれど、私はこの人の言葉を直接聞いているわ」と聞き手に思わせするような訳をしないと、常々思っています。ただ、スピーカーと私の波長が合う合わないというのは、どうしてもあります。ぴったりと合ったときは、面白いです。その意味で、私というパーソナリティが完全に消えるということはありません。

かつてフィリピンのコラソン・アキノ大統領の通訳にいたことがあります。彼女はまさに上流階級の奥様という雰囲気の方なのですが、そういうときに私の通訳も、上流の夫人のような感じのようにしなければいけないかなと思います。

——どのような方と波長が合うことが多いですか。

長井 環境活動家や社会運動家、女性運動のリーダーなど、この世界をよくしているという思いで現場で活動されている方は、やはり魅力的で、ときには「憑依」してしまうこともあります。私の性格ですね。

——若い読者へのメッセージをお願いします。

長井 ボランティア活動などで若い方と一緒する機会があります、みなさんとてもまじめですね。まじめすぎる

くらい。もう少しハチャメチャなところがあつてよいと思います。「自分探し」なんて高尚なことではなくて、目先の面白いことにどんどん食いついていったらいいのです。失敗が許される唯一の時代なのですから。

英語に絡めていえば、やはり伝えたいことがあるから、話したくなる。例えば過去形を覚えれば思い出を話せるし、未来形を覚えれば将来を語ることができます。日常会話であれば多少ブロークンでも大丈夫。論文やプレゼンテーションなどで正確さが求められる場面がくれば、正確な英語を学べばよい。いずれにせよ、その前にあるのは、大げさにいえば、自分のなかに外国の人と共有したいものがあるのか、社会に対して伝えたいことがあるか、ということだと思います。その意味でも、ぜひ外国に関心を持つてほしい。いまの若い人の間に「世界なんて広がらなくてもいい」という空気があることには、非常に残念に思います。 ■

ながい まりこ

仙台市生まれ。国際基督教大学を卒業後、設立間もないサイマル・インターナショナルの専属通訳者となる。以降、会議通訳者の草分け的存在として、国際政治・経済分野を中心に年間二〇〇件近くの業務を請け負うトップ通訳として活躍中。